

【すべての終りは すべての始まり】

「誰もやっていない事に挑戦」しますのでいままでと同じやり方では通用しません。ジャイアントキリングを起こせるのは、出来なくて当たり前に対して抗おうと挑戦する人達がしか番狂わせは起こせません。当たり前のことや、常識的なことしかやっていない人には起こせないのが「奇跡」です。だから、非常識で、反対する様な事に対して挑戦しました。それには過去の実績とか経験は関係がないからこそ、挑戦する価値があるのです。

デフリンピックにはこれまで2005年、2009年、2013年と3大会出場しているのですが日本は予選リーグ（4分4敗）で1回も勝ったことがありません。1勝するだけでなく予選リーグを突破するというのは、世界デフサッカー関係者内では想像出来ない事でした。事前の予想では、ウクライナ（過去2大会は優勝と準優勝で今大会も準優勝）が間違いなく1位通過、2位をアルゼンチン（昨年デフワールドカップベスト4）とイタリア（今大会ベスト4）が争って日本は勝ち点0で敗退と、みな予想し大変なリーグに入ったと同情され勝ち点1でも取ればと多くの声を掛けられました。最近のワールドカップの成績は2006年ジーコ JAPAN 1分2敗、2010年岡田 JAPAN 2勝1分1敗、2014年ザック JAPAN 1分2敗とフル代表でも3大会（2勝3分5敗）でサッカーの世界ランキングは46位となっておりメダル獲得まで日本はまだまだ遠い道のりがあります。

デフサッカー界では2006年-2009年「尾上直也」監督が土壌を耕し基礎を作り、2010年-2013年「柴田英輝」監督が種をまきアジアで初めて優勝し、「川元剛」フットサル監督が選手の意識を変え栄養を与え芽をだし、2014年-2017年「中山剛」と「前田崇資」コーチが引き継ぎ水をやりアドバイスを与え、世界と本気で戦えるチーム作りを10年以上継続的に行ってきた結果アジアで1番のチームに成長しました。結果が全てと言われますが勝つことだけが全てではないですし、自分の力を全て出し切り戦い抜いたので負けて得るものもあります。負けても立ち上がって食らいついていくことが心の強い人間を作りこの経験が次につながりますし、なによりこの4年間で選手が成長したことが一番の大きな喜びです。大会から2ヶ月後に静岡で行われました第51回全国ろうあ者体育大会で試合を観戦し「松元」「伊丹」GK2人の「心・技・体」のうち特に「心」の成長がみられたことも大きな喜びでした。

監督就任してから最初にはじめたことは、「あいさつ」「ゴミ拾い」「整理整頓」荷物置き場やトイレのスリッパをきれいに並べることからスタートしました。サッカーに置き換えて次にプレーする人がプレーしやすい状況になっているかなど選手たちに問いかけながらやってきました。指摘し素直に受け入れる選手は成長していきました。時間はかかりましたが改革は選手の意識を変え、チームを変えていきました。良い選手は人間的な部分がしっかりとしています。選手には良い時と悪い時ありますが、そういうところをしっかりとっておけば絶対に次の道が開けます。ピッチ外でのゆるみはピッチ内にも出てしまうというその信念は貫きました。

代表選手の選考方法は2013年9月の富山県で開催されました全日本ろうあ連盟主催「全国ろうあ者体育大会」から日本ろうあ者サッカー協会（以後、JDFA）主催の「全日本ろうあ者サッカー選手権大会」の全国大会を毎年2回視察し選手選考を行いました。そして、これらの選手選考を元にトルコサムスンで開催されました第23回夏季デフリンピックまでに、代表合宿（候補合宿舎）を21回開催しました。また、2014年にはイランで開催されました3rd Asia Pacific Deaf Football Championships、2015年には台湾で開催されました8th Asia Pacific Deaf Games、2016年にはイタリアで開催されました3rd World Deaf Football Championshipsに参加し3回の海外大会でも試合経験を重ねてきました。これらの遠征・合宿を通して選手選考を重ね世界と戦えるベストメンバー20人を選考し3月は龍ヶ崎市/流通経済大学、5月は品川/大井ふ頭中央海浜公園、6月は福岡/グローバルアリーナ、7月は姫路/エストパークでデフリンピックにむけての最終合宿と津田天満神社で必勝祈願を行い仕上げ大会に臨みました。

開幕戦4日前に現地入りしましたが公式トレーニング以外の日にグラウンド確保がなくこちらで確保が必要でした。日本代表といえどもサッカー競技選手の自己負担金は約25万円あり、部屋は大学の寮を利用し3人1部屋（普段は2人部屋にベッド1個追加）で食事は約200段の階段を食堂まで往復し、部屋と食堂にエアコンはない毎日汗をかける健康的な環境でした。宿舎と食堂や出入口までの移動、食事内容、参加費補助など本気でメダル獲得を目指すのであればもっと参加競技選手のことを考えて今後改善が必要と思います。競技場では余計なストレスを感じることなく、いままでの海外での大会の中で1番試合に集中できる環境が用意されていたのは、街のいたるところに天然芝、人工芝のグラウンドやフットサルコートがありサッカーを楽しんでおり文化としてサッカーが根付いており、試合で使用しましたスタジアムの雰囲気や芝の状態も素晴らしかったです。

初戦を迎えたウクライナには4年間この日のために全てをかけ大会前出来る準備は全てやり切りましたので不思議と気持ちも落ち着き気持ち、コンディションも120%最高の状態で挑み、チームで戦い、組織で戦い、全て出し切り全員で勝利をつかみ取りました。試合では自分が活躍してヒーローになってやるという選手がいるといい結果も出せません。選手、裏方、スタッフも、誰一人、自分だけがヒーローになろうとか、自分だけのためとかでやっている人がいなかったです。仲間のために何かやりたいとか、このチームの役に立ちたいとか、みんながそういう気持ち戦っていました。2戦目のアルゼンチン戦は0-2から執念で2-2に追いつき、4チーム全てが決勝ラウンド進出の可能性を残したままでの最終戦は、1年前に2-5と完膚なきまでに叩かれたイタリアでした。しかし立ち上がりから相手を圧倒しました。これまでの3試合で1番チャンスを作り攻撃しましたが、最後の最後で勝利の神様は微笑んでくれませんでした。全てが終わり宿舎に戻り試合のビデオを見返すと、終了間際のショートコーナーからの失点は1993年のドーハの悲劇を思い出し、ロスタイムの失点は2006年ドイツワールドカップ対オーストラリア戦が思い出されました。不謹慎かもしれませんが、悲しいとか、悔しいよりも監督に就任した4年前と比べて、よくここまで選手とチームが成長し世界と戦える様になったという嬉しさが込み上げ涙が止まりませんでした。特に「岡田侑也」「仲井健人」「竹内裕樹」の3人が1つのプレーに対して耳の聞こえない中で全員が同じイメージで動いた場面は鳥肌が立ち、彼らの成長がとても嬉しくいまでもよく思い出されます。

デフリンピックについて“障害を乗り越えて”という表現が使われることがあります。僕が感じるのは“選手はスポーツを通じて己と闘っている”ということです。そこに障害のあるなしは関係なく誰もが共感できることだと思っております。たとえば障害のある人たちが頑張っていて、そこから何かを学び取ろうという考え方もあるかもしれませんが世間一般にもっと普通にデフリンピックをスポーツとして楽しんでほしいと思っております。

大会期間中、日本国国旗に“和”と選手の決意を記入し戦ってきました。結果だけ見れば最終戦ロスタイムで・・・と惜しかったね、残念でしたねと落ち込んで下を向いていると思われる方がほとんどだと思いますが、ここまで戦えた選手達、一緒に4年前から戦ってきた仲間達を本当に誇りに思いますので全員を讃えてくださればと思います。大会後の結果と評価は

似て非なるものです。評価は第三者が下すもので、結果をみて予選敗退として批判される方もいますが、現地では記憶に強く残ったようで、準々決勝以降5試合観戦し勉強にいったのですが、会場の現地ボランティアスタッフが声をかけてきたり飲み物や食べ物を持ってきてくれたり帰りのバスまで手配してくださったり、いままでこちらに見向きもしなかった他国の監督が昨年のイタリア大会時の日本代表チームと比べての成長に驚かれ横に来て一緒に試合をみながらホワイトボードを使用し片言の英語で情報交換しお互いのストロングポイントとウィークポイントや練習や強化方法や戦術の情報交換し、何が通用し何が必要なのかも明確になったことも大きな収穫です。4年後のデフリンピックに向けてのチームの始動は7月25日(火)8:00から練習を開始したのは世界で一番早いですし、また代表選手の平均年齢が25歳より若いことにも驚かれ4年後はこの大会を経験しているのもっとよくなると話されました。

現時点の世界ランク1位は間違いなく優勝したトルコで、このレベルの選手が次世代も続くのであればどこの国も勝つことは難しいと思うくらい選手個人のレベルが跳びぬけております。2位グループはウクライナ、ドイツ、ロシアでベスト4、その次のグループにエジプト、イタリア、イギリス、日本が入り現在の世界ベスト8という意見が多く聞かれ、やっと世界で戦えるスタートラインに立つことができました。昨年の7月イタリアワールドカップではサウジアラビアに5-0、今年の6月の日韓戦では4-0と圧勝し、アジアの雄イランは監督が変わりチーム力が落ちている現在試合をすれば余裕を持って勝つことができるでしょう。アジアチームの最高順位がイランの8位でしたのでアジアレベルで満足することなく世界を意識し次回大会は予選突破を最低ラインと考えてメダル獲得することを考えるのであれば選手、協会スタッフは普段からどこかのチームに所属し試合や大会を経験し、食生活から世界大会を意識し今大会で感じたことを日々忘れずに、まず個人力を高め4年間過ごしていく必要があります。

今大会で出来たレベルはいままでで最高のレベルで真っ向から戦いウクライナを破って試合は『サムスンの奇跡』ですが、これに満足せずに、今後はこのレベルを最低ラインに考え次につなげてほしいとの思いから『サムスンの悲劇』とミーティングで伝えました。試合で勝つためにチームに浸透させなければならない要素はたくさんありますが、ここから先の日本代表に必要なのは90分の間継続してやり続けなければならないことがある一方で、試合の流れ見ながら緩急をつけてエネルギーを貯めるその使い分けができるかどうかです。選手個人の走力や体の使い方などレベルアッ

プは必要ですが確実に世界を驚かせる戦術、やり方がはっきりとみえてきていますが守備の部分で身体能力の部分で差を感じます。それでも、世界では同じ体格でもやれている選手もいますので、自分もできると思っしてほしいですし、海外や日本の他の選手のプレーを観て勉強にしてほしいです。体が小さいから大きい相手に勝てないことはありませんしそう思っていましたらいつまでも勝てません。それぞれの選手が身体能力を含め自分のレベルを上げることが必要です。個人が対等にやれば、チームも対等にやれます。あとは皆がどれだけ同じ意識でやれるかで一層チームが成熟していきます。

寂しい気持ちもありますが次にバトンを渡す時がやってきました。一緒に戦った20名の戦士「古島啓太」「中島正行」「江島由高」「松本弘」「塩田知弘」「河野翔」「千葉駿介」「松元卓巳」「桐生聖明」「竹内裕樹」「吉野勇樹」「東海林直広」「仲井健人」「山森裕介」「大西諒」「岡田侑也」「岡田拓也」「林滉大」「西大輔」「伊丹秀行」と、主将としてチームを背負い次世代に引き継いだ「野呂啓」「細見尚史」、アジア大会を戦った同志「船越弘幸」「菱岡敬彰」「毛塚丈博」「綿貫俊基」「土屋祐輝」「渡邊亮平」「福田雄気」「中島大介」「設楽武秀」「木村亮太」「藤村厚史」、サポートメンバーとして最後までチームを支えた「原口凌輔」「奥元怜哉」「大石直彦」のみんながいたから代表チームが成長し世界のスタートラインに立つことができました。今大会では協会スタッフと日本選手団本部皆様のサポートがあり、特に選手のコンディションをいい状態に保ち続けて一人で何役もこなすサポートしてくださった「佐保泰明」トレーナーがいたから5日間で3試合の日程でも世界の強豪と戦い抜くことができました。今まで応援してくださった皆様と、支えてくれた家族に改めて感謝し今後の日本デフサッカーの発展を心より祈念し4年間の旅を終わらせていただきます。本当にありがとうございました。